

A photograph of a room with a piano, a lamp, and framed pictures. The piano is in the foreground, and the lamp is to the right. The background shows a window with a view of a lake and trees. The room is dimly lit, with the lamp providing the main source of light.

# 1953年、

～チャップリンが愛した湖畔の丘～

# マノワール・ド・バン

“マノワール・ド・バン”。希代の喜劇王サー・チャールズ・スペンサー・チャップリンが最後の25年間を過ごした私邸は、そう呼ばれていた。2016年、この私邸と隣接した博物館を核としてスイス南西部の街・ヴヴェイに開園した「チャップリン・ワールド」には、没後40年となる今年も、世界中から多くの映画ファンが足を運んでいる。彼は、レマン湖を望む街の丘の上で、何を思い、何をしていたのだろうか。チャップリンが住まい、愛した、美しい湖畔の街を訪ねる。

AGORA Special  
vol.309

Vevey

沖村かなみ＝文  
Text by Kanami Okimura  
安彦幸枝＝撮影  
Photo by Sachie Abiko

ヴヴェイの船着き場近くの湖畔には白鳥の群れが。遊覧船に乗って湖からアルプスやラヴォーの葡萄畑を眺めるのもいいだろう。



MAINOIR DE BAN

## アルプスと レマン湖の懐で

人生のフィナーレになぜ、彼はこの地での暮らしを選んだのだろうか？ そんな想いととも訪れた、スイス南西部ヴォー州のレマン湖北岸に位置する街、ヴヴェイ。ジュネーヴから列車で約一時間の場所にある人口一万七〇〇〇人の小さな街が、今回の旅の舞台である。

であるとするれば、湖は男性的だ。大地にたつぷりと水面をたたえた湖は包容力に満ち、旅人の心に安らぎを与える。冒頭の、彼もおそらく湖の風景に心癒されたに違いない。彼の名はサー・チャールズ・スペンサー・チャップリン。俳優、脚本家、映画監督、作曲家などいくつもの顔で歴史に名を刻む、キング・オブ・コメディだ。山高帽にチョビ髭、ステッキといった放浪紳士のキャラクターでお馴染み、チャーリーは、ここスイスではフランス語で「シヤルロ」と呼ばれ親しまれている。アメリカでサイレント映画のスターとして大成功を収めたチャップリンは、一九一七年にハリウッド

のサンセット通りに撮影スタジオを構え、それまでのドタバタ劇とは異なる物語性の高い長編映画を撮るようになった。「モダン・タイムス」では資本主義社会に対する批判を込め、第二次世界大戦勃発時の一九四〇年公開の『独裁者』では全編台詞を入れた初のトーキー映画に挑み、喜劇を通してナチズムを批判した。こうした彼の活動は当時、赤狩りの風が吹き荒れていたアメリカ連邦政府を刺激し、共産主義的であると何度も召喚命令を受けた。その後、戦争を皮肉った『殺人狂時代』を製作するも、各地で上映中止に。そして一九五二年、『タイムライト』のプレミアに出席するため家族とロンドンに向

1.コルシエ村にあるチャップリン公園にはレマン湖を望む彼のお気に入りだったベンチがある。2.ヴヴェイの街角で見つけた短編映画の傑作『給料日』の上映を告知する貼り紙。3.市内を走るバスもご覧の通り、チャップリン仕様に。4.ヴヴェイの湖畔にあるプロムナードでは散歩を楽しむ人や釣り人も見られる。



1.博物館となっているチャップリンの旧邸宅「マノワール・ド・パン」は、1840年に建てられた新古典主義の建築。国の文化財に指定されている。敷地には桜やりんごの木など緑が溢れる。2.ユー・ジーン・チャップリン氏は現在、ローザンス近郊に住みミュージアムの活動に協力している。3.「チャップリン・ワールド」に併設されたレストラン「ザ・トランプ」ではシャスラ種の白ワインを使った魚料理など、郷土料理やご当地ワインが楽しめる。4.「スタジオ」では『キッド』撮影中にチャップリンが実際に身につけたコスチュームも展示。



「スタジオ」では彼の原点でもあるパントマイムの魅力をフィルムで紹介。指先からつま先まで無駄な動きが一つもなく、アイロニカルな笑いを表現しているのがわかる。

「父は自宅のテラスから見える湖や山の風景をととても気に入っていました。私たちは八人きょうだいの大家族でいつも賑やかでしたが、父は家の中ではまったく一般的な父親だったと思います。読書家の父は書齋で本を読み映画の構想を練ったり、リビングでピアノを弾いて作曲をしたりしていました。母を連れてよく湖畔へ散歩に出かけ、新聞を買ってベンチで読んだり、私たちを連れて映画館に行くこともありましたね。ここウヴェイでは誰にも干渉されず、普通の暮らしができたことが、父にとって最高の環境だったのです」

「マノワール・ド・パン」一階の居間には、ウヴェイに住んでいた天才ピアニスト、クララ・ハスキルがチャップリンのために選んだというスタインウェイのピアノが静かに時を重ねていた。二階の元寝室の部屋では、家族の日常を撮影した一六ミリのビデオが流れている。庭で子どもたちと戯れるチャップリンの表情から、平和に満ちた一家の暮らしが伝わってくる。

邸宅前には広大なブライベートの庭があり、来場者は散策できる。樹齢一〇〇年以上の杉や桜が茂り、まるで森のようだ。チャップリンが暮らした頃は鹿や狐といった珍客が訪れ、彼は餌を与えては歓迎したという。ハリウッドでは体験でき

かったチャップリンは、船上でついにアメリカ連邦政府の国外追放命令を受けることとなる。

そんなチャップリンが平和を求めて安住の地を選んだのが、スイス。数カ月間かけて家探しを行った彼は、ウヴェイの丘の上のコルシエ村に建つ「マノワール・ド・パン」(パンの館)という名の元アメリカ大使邸宅にひと目惚れし、一九五三年一月五日、一家でこの地に移住する。

一九七七年のクリスマスの日に、彼は八八年の生涯に幕を下ろすことになるが、それまでの約三五年間、この館で映画製作に携わりながら家族と充実した日々を送った。

そして、没後四〇年をひかえた二〇一六年四月、この地に構想一六年を経てミュージアム「チャップリン・ワールド」がついに完成。総面積三〇〇〇平方メートルの敷地には素顔のチャップリンを紹介する邸宅を公開した「マノワール・ド・パン」と、彼の映画の世界観が体験できる「スタジオ」がある。

私はある日の午後、このミュージアムでチャップリンがスイスに移住した一九五三年に生を受けた四男のユー・ジーン・チャップリン氏と会う約束をしていた。現れたユー・ジーン氏は、小柄なチャップリンに比べると予想外の大柄な男性であったが、笑顔の口元にチャップリンの面影が重なって見えた。

「父は自宅のテラスから見える湖や山の風景をととても気に入っていました。私たちは八人きょうだいの大家族でいつも賑やかでしたが、父は家の中ではまったく一般的な父親だったと思います。読書家の父は書齋で本を読み映画の構想を練ったり、リビングでピアノを弾いて作曲をしたりしていました。母を連れてよく湖畔へ散歩に出かけ、新聞を買ってベンチで読んだり、私たちを連れて映画館に行くこともありましたね。ここウヴェイでは誰にも干渉されず、普通の暮らしができたことが、父にとって最高の環境だったのです」

「マノワール・ド・パン」一階の居間には、ウヴェイに住んでいた天才ピアニスト、クララ・ハスキルがチャップリンのために選んだというスタインウェイのピアノが静かに時を重ねていた。二階の元寝室の部屋では、家族の日常を撮影した一六ミリのビデオが流れている。庭で子どもたちと戯れるチャップリンの表情から、平和に満ちた一家の暮らしが伝わってくる。

邸宅前には広大なブライベートの庭があり、来場者は散策できる。樹齢一〇〇年以上の杉や桜が茂り、まるで森のようだ。チャップリンが暮らした頃は鹿や狐といった珍客が訪れ、彼は餌を与えては歓迎したという。ハリウッドでは体験でき